

audacity は、その初期設定状態で、他の **DAW** に比べて、非常に多くのハードディスク容量を必要とする。

もちろん、設定でその必要量を減らすことはできるが、その設定変更はせっきくの高品位をある程度犠牲にすることでもあり、あまり推奨できることではない。(注1)

かつては、記憶 / 作業領域であるハードディスクは、非常に高価なアイテムだった。しかし近年はコンピュータそのものの低価格化とともに、ハードディスクドライブの価格も低価格化も進行中で、ドライブそのものの価格は **1TB (= 1000GB = 1000000MB = フロッピーディスク 100 万枚分)** あたり **1 万円**程度で、十分に低価格といえる状況にある。そうは言っても、中学・高校生や苦学している大学生には、やはり高価であろうし、また、ひょっとしたら中古品 (あまりおすすめはしないが) が身近に余っているかもしれない。

筆者が強く勧めることは、**audacity** 用に「**audacity 専用**」のドライブを確保することだ。

理由はいくつかある。

- A 1)** コンピュータのシステムプログラムが収まっているドライブ (正確にはパーティション) は、通常の使用で断片化が常に進行し、オーディオファイルのような連続性を重要視する目的では、この断片化は好ましくない (安定再生できるトラック数が減少するなど)。
- A 2)** システムプログラムが収まっているドライブが、**audacity** の作業により、万一 (というより、作業ファイルを放置し、散らかしっぱなしにしていると、よく起こる) 「ディスク・フル」状態に陥ると、**audacity** で作業中のファイルを破棄することは言うに及ばず、不要ファイルを消去することもままならなくなってしまうことがある。したがって、システムプログラムのあるドライブ (C:) には、**audacity** 関連のデータファイルや、テンポラリー・ファイル (後述) を置かないようにしたほうがよい。
- A 3)** これらデータファイルやテンポラリー・ファイルを置くドライブに専用のものを用意することで、重要な作業を行う前には、そのドライブをフォーマットすることで、より高い安定性が得られる。
- A 4)** 外付けドライブに、すべての必要なファイルを置くことで、そのドライブを持ち運べば、どこでも作業することができる。

など。

☆どのようなドライブを用意すればよいか。

○新品のドライブを用意するなら、容量は **320GB** 程度 (あるいはそれ以上) が、適切であろう。**320GB** は随分大きな容量だが、現在の価格はそれ以下の容量のドライブでは逆に割高になってしまう。コンピュータと接続するには、ドライブとケース (インターフェース内蔵の) の両方が必要だが、最初からセット販売のものもある。また **320GB** の容量があれば、**2 ~ 3 時間**程度の多チャンネルのファイルの作業がストレス無く可能だ。

○ドライブはいくつかの方法で、コンピュータと接続できるが、**USB2.0**、**IEEE1394** (ファイヤーワイヤー接続) **S-ATA**、などのインターフェースがある。もっとも汎用性

が高いのは、**USB2.0** 接続であるが、ドライブ用のケース（入れ物）によっては複数の形式のインターフェースに対応するものも販売されている。

○ドライブには **2.5** インチのノート・パソコン用のものと、**3.5** インチのデスクトップ用のものが販売されている。**2.5** インチは小型軽量で、動作するための電力もコンピュータから供給できるものが多いが、**3.5** インチでは必ずドライブ用に別電源（たいていは、ケースに付属している）が必要であるが、**3.5** インチは **2.5** インチより高速で、容量あたりの単価が安い。

☆どのようなフォーマットにすればよいか。

○ **320GB** をまるまる一つのパーティションにしてしまうよりは、**100GB** ずつ三つのパーティションに分けた方が使いやすい。これは、それぞれのパーティションに異なる種類のファイルを取める目的と、それぞれのパーティションの容量が減ることで、必要に応じてフォーマットしやすいという利点があるからだ。

☆ **audacity** 側の設定

○ **audacity** が使用するファイルは次の種類のファイルがある。

- 1) 音情報の入出力のためのファイル
- 2) プロジェクト・ファイル
- 3) テンポラリ・ファイル
- 4) **audacity** の各種設定を保存する、コンフィギュレーション・ファイル

1) **audacity** で録音することもあるだろうが、最も高品位な作業は、ファイル入力、ファイル出力の「File to file」で使用することで、そのための領域を確保する必要がある。

2) プロジェクト・ファイルとは、**audacity** 専用の特殊なファイルで、作業中の状態すべてを保存再現できる、大変便利な形式のファイル。また、一度読み込んだファイル（長尺や多チャンネルのファイルでは、ファイル読み込みそのものに相当な時間がかかる）は、次回から読み込み待ち時間が無くなるなど、利点の多いファイルだ。

しかし、異なるバージョンの **audacity** で開くことは、ファイル破損の危険をはらんでいるし、音データファイルとプロジェクト・ファイルの位置関係が変化すると開くことができなくなるなどの問題があるが、専用ドライブを用意することで、その危険を回避しやすい。（ver,1.3.11 になり、プロジェクトファイルの安定性は随分と向上した。）

3) テンポラリファイルは、1) 2) よりももっと直接的に **audacity** の動作に関わるファイルで、実質的には **audacity** の「頭脳」の一部とも言える特別なファイル。

ところが、このファイルは **audacity** が起動中のときにだけ現れ、**audacity** を正常終了すると消去されるために、そのようなファイルがあるとに使用者は気付きにくい。A 1) で解説したような、「ディスクフル」はこのテンポラリファイルで起こることが多く、またそのファイル作成位置は初期状態で

C:\Documents and Settings\ユーザー名\Local Settings\Temp\audacity_temp だ。

使用者はこのファイルの作成場所を指定することができる。設定は「編集」→「設定」→「ディレクトリ」で、速くて大容量のドライブがあるなら、そこを指定すると操作が快適になる。多少古いノートパソコンで、**USB2.0** が付いているなら、現在の内蔵ドライブで作業するよりも確実に高速化できると思う。もし **USB2.0** が無い場合、**USB1.1** のままでは高速化は難しい。

注意) この設定は、設定した後一度 **audacity** を再起動しなければ有効にならない。
また、再起動したときに、その指定されたドライブが見つからなかった場合、初期状態の **C:\Documents and Settings\ユーザー名\Local Settings\Temp\audacity_temp** に戻ってしまうので、このようなユーザー指定を行っている場合は、起動する度に、この設定を確認しなければならない。

- 4) **audacity** の各種設定や、イコライゼーションのパラメータ、エフェクトの設定状態を積極的に数値設定したり、プリセット化するためには、このコンフィギュレーションを操作するとより高度な作業ができるが、内容が多少高度なため、プロフェッショナルマニュアルを参照ください。ちなみにその格納位置は、**C:\Documents and Settings\MUE\Application Data\Audacity** です。

***** まとめ *****

上記したように **audacity** は、十分なハードディスク容量を必要とするソフトで、外付けドライブを用意することで、より快適な（とくに長尺の場合）作業のためには専用のパーティションが有効であるといえる。

重要

外付けドライブを使用することは、有意義と言えるが、次の作業手順を守らなければ、作業にとって致命的な問題が生じる可能性がある。

- ドライブは **audacity** が起動する前に、コンピュータに接続・認識させておく必要がある。
- ドライブを切り離す前に、**audacity** を終了する必要がある。これらはとくにテンポラリを外付けドライブに置く場合、必須の手順だ。

***** Q & A *****

Q: パーティションの作成の方法がわからない。

A: わかる人に尋ねるか、他のテキストを参照してください。

Q: 手持ちに 30GB の外付けドライブがあるが、その程度の容量でも、効果は期待できるか？

A: 速度に関しては、インターフェースやドライブの性能に依存するが、安全性など効果を期待できる部分はある。

Q: **audacity** 起動中に、誤ってテンポラリのある外付けドライブを引き抜いてしまったが、被害の範囲はどの程度？

A: 多くの場合、その作業中のファイルや作業は救出不可能でしょう。また、そのとき起動していた **audacity** は、ハングアップするでしょう。しかし運が良ければ、再度ドライブを認識させ、**audacity** を起動すれば、破損したプロジェクトの修復モードに入り、ある程度の救済はできるかもしれません。

しかしかなり面倒な作業になることが多く、破損ファイルは破棄したほうが賢明でしょう。そのようなときのために、作業結果は、こまめにファイル出力（書き出し）しておくことを、「強く強く推奨」します。書き出しが終わったファイルは、おそらくは無傷でしょう。